

公開シンポジウム「学校を問い直す」

1. はじめに

コラボレーション・センターでは、よりよい教育のあり方を模索しつつ、「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」の3つのユニットによる実践的なアプローチが進められてきた。

各ユニットによる個々の取り組みは、年を追うごとにその深度が増し、つながりが強固になってきたが、各ユニット間の「コラボレーション」が課題として残されてきた。

2009年度は、この課題を達成する第1歩として、「学校を問い直す」というテーマを掲げて合同シンポジウムを実施することとした。それぞれのユニットが関わる学校や人たちは、形やアプローチの方法は異なるものの、いずれも「学校」というものを深く問うていると考えられたからである。

本稿においては、このシンポジウムについて報告をおこないたい。

2. シンポジウム概要

2009年11月7日（土）14時から17時に、芝蘭会館別館研修室1にて公開シンポジウムとして実施された。

まず、矢野研究科長より、ベイトソンの言葉を引きながら、「左右の目で見ると奥行きが出てくる。単に情報量が増えるだけではなく、比較によって新たな次元が生じる。今日の3つのお話もそういうものである」という挨拶があった。

続いて、京都市立醍醐西小学校の取り組みについて、竹田敏広先生からご発表があった。学力テストの結果もふまえながら、いかにして学力保障に取り組んでいるかが紹介された。醍醐西小学校では、国語が中心に据えられている。これは、国語だけに力を入れるとい

うことではなく、コミュニケーションの力をつけ、その機会をもち、そこから他の教科の理解をもめざすものである。学習理解の基礎にあるのは、生活基盤であり、学習指導の前に、生活指導が重要であることが示された。そのために、宿題をする状況・文化を作り育てていくことをめざし、家庭訪問を行っていることが報告された。

熱意ある関わりが印象的なご報告であった。

次に、京都市立洛風中学校の須崎教頭先生から、洛風中学校の取り組みについての紹介があった。須崎先生は平成15年度の開校準備段階から準備委員として洛風中学校と関わってこられた。前例のない不登校生徒のための学校をつくるにあたって、それぞれの準備委員がイメージを持てず、どんな学校にすればいいのか混乱が生じた。その中で、まずはこれまでの学校らしくない学校から始めよう、既存の学校とは異なる学校を造ってみようということになったという。休みたいときに休め「自由」な学校ではあるが、さまざまな生徒の行動にどう対応してよいのか苦悩する教師たち。これまでの学校で傷ついてきた子どもたちにどこまで注意してよいのか。教師としてのこれまでの経験が生かせないことを実感したという。

そんななかで、自分たちを守る手立てとして生徒の方から校則を求める声上がる。卒業式が学校にとって一つの転換点となる。厳かなセレモニーとして実施することで、生徒にとって、感動を受け心に残る卒業式になり、ここから、日常と節目のメリハリが大切と実感したという。

子どもたちにとって、自身が困る場面に出会うことや、ゆれることも必要なこと。大人が答えを用意するのではなく、子ども自身が困難に直面し、ゆれながら答えを考えていく。「教師は安全と安心の枠をつくり、その枠の中でゆれる場を保証する」という語りが印象的であった。

三番目に、南山城村童仙房の内藤浩哉さんから「田舎でのホームスクーリング」と題するご報告があった。1992年に移住、地元（野殿童仙房小学校）の子どもたちを見て、このような場所で子どもを育てたいと思われたとのこと。現在、4人の子供（9歳・6歳・4歳・1歳）を子育て中である。

2003年に小学校統廃合で、「南山城小学校」が開校。一村一校の方針で野殿童仙房小学校も統合の方針が出され、地元の意見は分かれたが、2006年に廃校となる。そこで小規模校（全校生徒10数人）の良さがなくなり、新しい小学校に魅力を感じなかった。ホームスクーリングを始めたきっかけは、新小学校を含めた教育への違和感。それは、型にはめる、集団への協調性、結果を急ぐといったことを重視した結果、子どもの自律性・主体性が奪われてしまっているのではないかと、ということだと言う。

子どもの環境として、何より本をふんだんに与えて



▶矢野智司研究科長のご挨拶

いる。特に図鑑類・絵本・学習マンガやマンガ（手塚治虫やサスケ・カムイ）などを自宅に置くほか、図書館から2週間おきに家族で30冊前後借りてきている。「対象年齢」は気にせず、子どもが興味をもった分野はどんどん進めていく。工作・料理・お絵かきなどでは、道具や電気パーツなど材料はほぼ無制限に与えて、何でも自分で作る。パソコン・デジカメも一人一台、中古のものを「壊してもいい」ものとして与えている。

学習についてはなるべくストレートに正解を「教えない」ように、試行錯誤させる方針。社会・理科にあたる部分は、興味に任せているが、同年齢より進んでいると思う。漢字・計算は繰り返し練習が苦手なので、日課を決めて、インターネットで入手した教材を使って練習している。ひらがな・カタカナは自作の練習シート、他は学習ソフトなどを利用。自ら課題を発見し、問題解決に取り組むというスタイルが自然に定着してきている。

ホームスクーリングは社会性が育たないといわれるが、地域に出入りする人々（おとな・子ども）と交流する機会が増えることで、人間関係を構築するスキルを身につけている。ホームスクーリングは「集団型」の社会性よりも、「自立型」の社会性を身につけるのに有利なのではないか。まわりの人達も否定的な反応はほとんどなく、教育委員会・小学校とも関係は良好で、今のところ問題はおこっていない。しかし独善的にならないよう、学校教育とホームスクーリングの双方の視点から、批判的に検証していく作業が不可欠。「醍醐西小、洛風中とも共通点を感じており、困難なところからこそ変えていく力があると思う」と結ばれた。

3. 交流会

三人のご発表のあと、参加者全員を交えて、「交流会」が開かれた。三人の各発表者を中心として3グループに分かれ、活発な議論が展開された。

醍醐西小学校グループでは、家庭環境が困難な子どもたちに対する学校としての指導について、より細やかな質問があった。それに対する答えのなかで、大切に



▶交流会の様子

にしているものとして、クラスの友人、教師としてのつながりが挙げられていた。また、「家庭・学校・地域」のトライアングルができているのが理想だが、「家庭・地域」を学校が支えているのが現状だという話もあった。

洛風中学校グループでは、「洛風は、元の中学校に戻すことを目的としているのではなく、前に進むことを考えている学校である」という説明があった。また、洛風中学校はまさに学校を問い直すところから始まった学校だが、学校のすべてを否定しているのではなく、元の学校には行けないものの、それでも集団を求める子どもたちが来るのであり、また、生徒自らが「枠」を作ってきた経緯が紹介された。

童仙房グループでは、学校とホームスクーリングとの関係を巡っての質問があり、内藤氏から、関係は良好であるということが述べられた。また内藤氏は、ホームスクーリングについて「子どもが幼いほど、親の枠を強烈に押しつけてしまう。だからこそ、日々振り返り、毎晩夫婦で教育について長時間話し合う。自信を持ってやっていることは何一つなく、常に自分がやっているのか問う」と述べられていた。

4. 最後に

いずれの実践もたいへん心に残るものであった。「教育」というものをあらためて認識させられたかのような感覚があった。

学校は、「自明」ではない。たぶん学校が初めてできたとき、あるいは、困難な状況のなかで初めて学校教育に触れたとき、誰しもが教育を受ける「喜び」を感じたのではないだろうか。しかし、教育制度が続くうちに、それは硬直化し、どこか生命性を失ってしまったのかもしれない。

不登校の現象は、学校制度への痛烈な批判であるとともに、それでもなお学校が持っている力を改めて示しているようにも思う。3グループに共通してみられた「枠」の重要性や、悩みながらの実践は、教育のもつ重要な点を示しているように思われた。

シンポジウムは、中身が濃く、教育のもつ力を再認識させられた時間でもあった。

最後になったが、シンポジウムにおいてご発表いただいた、3人の方々に心よりお礼を申し上げたい。

（文責：桑原 知子）